

理解度&釣れる度100%



マルキュー

優良 餌本



パワーエサ パック



The target period 6月～11月

Contents

- 02 Pickup! New item!!「ほどき」
- 04 両ダンゴの浅ダナ釣り
- 03 両ダンゴのチョーチン釣り
- 12 ウドンセットの浅ダナ釣り (10月、11月)
- 16 「ヒゲトロ」セットの浅ダナ釣り
- 20 “ホタチョー”(デカバラケ & デカウドンのチョーチンセット)
- 24 ベレット系両ダンゴの底釣り
- 30 両グルテンの宙釣り (10月以降)
- 34 盛期の実績ブレンド紹介!「ほどき」はここでも活躍する!?

夏秋号
2026

HERA BAIT POWER BOOK

Pickup! New item!!

ネバリをほどき、芯をコントロール 「ほどき」



ダンゴの共エサ、バラケエサにブレンドすると経時変化によるエサの持ちすぎ現象の発生をやわらげることができます。練り加減の調節や、ネバリの付きすぎたエサへの追い足しがしやすいため、エサの芯の残り具合がコントロールできます。練っても重さがでにくいいため、軽くてネバリのあるエサの調整にもおすすめです。



軽さが特徴の麩材。ネバったエサをバラケさせる素材が配合されているのがポイントだ。

重さ
バラケ性

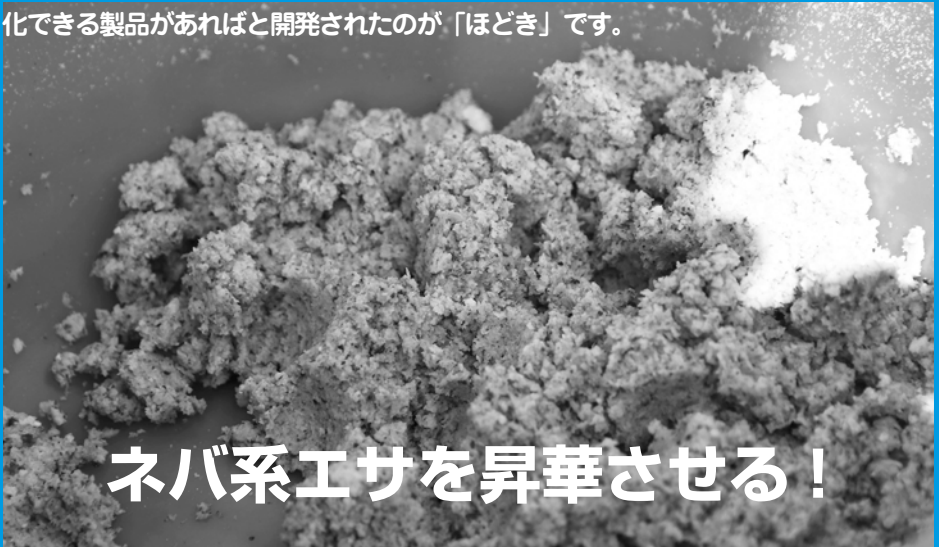
軽い	☒	☐	☐	☐	重い
弱い	☒	☒	☒	☒	強い

コンセプト

ここ数年、両ダンゴのエサは、ダンゴエサのベースとして活躍している「カクシン」、エサ持ちをより強化できる「カルネバ」など、ネバリが強い製品が主流となっています。エサを持たせるために当然ネバリは必要で、しかも作ったままでも使えるレベルに仕上がり、誰でもエサを持たせやすい釣れるエサとなっています。

その反面、どうしてもネバリが強くなりすぎる傾向にあるのは事実です。さらに経時変化と言われる、時間が経つほどにそのネバリが強化される現象が起きます。これは避けることできないエサの性質であり、そこを名手たちは、手水で軟らかくしてバラけさせたり、開くエサを足したりしながら調整しています。

これを何とか解決しようと、ネバリを上手く利用しながら水中での魅の散り方を強化できる製品があればと開発されたのが「ほどき」です。



ネバ系エサを昇華させる！

ハウツー

「カクシン」、「カルネバ」を中心に組み立てられる両ダンゴですが“エサがネバってきたな”と感じたタイミングで「ほどき」を使ってください。使い方は、使用しているエサに追い足すだけでOK。付けやすさは変わらずに水に入ったあとの開き具合は改善されていると思います。



最初からブレンドする場合は、“100cc”からの使用をおすすめします。使ってみて、さらにボソ感が強いほうがよければあとから追い足すすれば十分です。

また、ヒゲトロセット、ウドンセットのバラケにも有効的です。つねに開きを維持しながら、付け方で状況に合わせて変えていけるようなバラケエサが簡単に作れます。

盛期に数を釣る定番釣法

両ダンゴの浅ダナ釣り

釣り方の基本

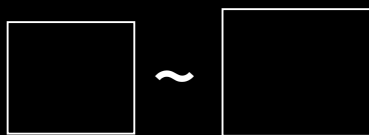
両ダンゴの浅ダナ釣りは、テンポよくエサ打ちを繰り返すスピーディーな釣りで、盛期のへら鮎釣りにおいて一番数が釣れる釣り方です。この釣り方において一番重要なのはエサを持たせること。高活性時のへら鮎はエサに対して強烈にアタックしてきます。このへら鮎のアオリにエサが負けてしまっても、いくらウキが動いてもなかなか食わせることができません。

エサが持っているようで、実は肝心のタイミングで抜けてしまっていることも多い。強いサワリがでて、いかにもアタリそうなどころでアタらないのは、まさにその典型です。

この釣りではとにかくエサを持たせることに徹底して釣りを組み立てることが最重要になります。

●オモリ 実寸大

0.25 mm厚板オモリ 15 mm × 17 mm ~ 17 mm × 20 mm



タックルセッティング

仕掛けは基本的に強い方向でセッティングしてください。弱いセッティングではエサを持たせることが難しくなり、釣りそのものが組み立てられません。特にウキは大きめのものを選びましょう。

■仕掛け図

竿●8~9尺(規定最短)

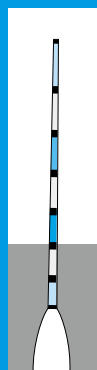
※混雑時は1~2尺のぼす

ミチイト●1号

ウキ●パイプトップ
(メーター規定) ボディー7 cm
(タナ 50 cm) ボディー5 cm

ハリス●0.6号 35 cmと 45 cm

ハリ●上下6号



エサ落ち後はトップ全体の3分の2以上が水面にでるよう設定する。

今シーズンイチ推しブレンド!!

●エサブレンド

「カクシン」400 cc+
「浅ダナー本」100 cc+
「カルネバ」100 cc+
「ほどき」100 cc+水 200 cc



+



+



+



+

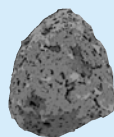


●作り方と打ち始め

「カクシン」400 cc、「浅ダナー本」100 cc、「カルネバ」100 cc、「ほどき」100 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせてから水200 ccを注ぐ。ムラがないように大きく20～30回かき混ぜ、エサがまとまりだしたら基エサの完成。エサへの吸水が安定するまでしばらく放置。これを1/3に小分けして10回ほど押し練りをし、エアーを抜いて使い始める。これでウキが沈没するぐらいエサが持てばOK。持たないようならさらに押し練りで調整する。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=6号

STEP ② タナを浅くする（※タナ規定が無い場合）

タナの規定がない釣り場に限定されますが、タナを浅くすれば落下中のエサへのへら鮒の攻撃が減りますのでその分エサが持つようになります。ですから、タナ規定がない釣り場でエサが持たないときは、シンプルにタナを浅くしてみましょう。またタナを浅くした分、余計な動きが減りますので、カラツンや糸ズレが多いときにもタナを浅くすることは有効なテクニックと覚えておきましょう。

STEP ③ ハリスを詰める

ハリスを詰めると落下中のアピールが減り、へら鮒の攻撃が減るのでエサが持つようになります。先に触れたタナを浅くするのと同じような効果が得られます。特にウキが立ってからなかなかエサがナジまないような場面で試したい対応です。メーター規定ではスタート時のハリス長が35cmと45cmなので、まずは5cmずつ詰めてみましょう。それでもエサが持たないようならさらに5cmずつ詰めてみましょう。またハリスを詰めることで、余計な動きが減りますので、カラツンや糸ズレが多いときにも効果があります。ただし、ハリスを詰めることでサワリやアタリがでなくなったら、ハリスの長さは元に戻してください。

STEP ④ 「GD」を使いこなそう！

盛期の釣りなので、へら鮒が水面ではしゃぐような場面も多くなります。こうなるとエサが持たなくなり、より一層ウワズリを招いてしまいます。これを抑えるのに「GD」を使ってみてください。使っているエサにパラパラと振りかけて混ぜるだけ。こうすることで着水時から落下中のエサのバラケを抑えられ次第にへら鮒のタナを下げるができます。この「GD」効果はかなり有効なのでぜひためしてみてください。



両ダンゴの浅ダナ釣り

釣るためのテクニック

STEP ① エサを調整する

元々ネバる素材をブレンドしてエサ持ちのよいエサに仕上げますが、作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから押し練りを加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安としては、ウキのトップ先端ギリギリまでナジむぐらいのエサ持ち加減です。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなります。こういうときは、さらに押し練りを加えてエサが必ず持つように調整します。



写真右側がエサをかき混ぜただけの状態（基エサ）。左上が押し練りを加えた状態。エアーを抜くことでエサが丸めやすくエサが持つようになる。打ち始めから押し練りを加えた状態で使い始めること。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押してエアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



ダイナミックな釣りが楽しめる

両ダンゴの チョーチン釣り

釣り方の基本

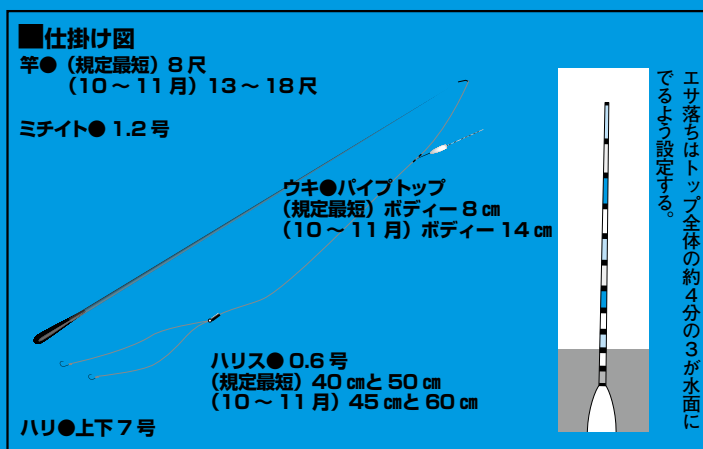
両ダンゴのチョーチン釣りは、豪快なアタリと深場からへら鮎を引き抜くダイナミックさが面白い、盛期ならではの釣り方です。

この釣り方において一番重要なのは、浅ダナ同様エサを持たせることです。浅ダナより狙うタナが深い分、よりしっかりとエサを持たせなければなりません。タナまで確実にエサを持たせることがへら鮎を厚く寄せることにつながり、それこそ時合ができれば毎回のよう強いアタリで釣れ続きます。そのためには必ずエサを持たせることを強く意識してください。

またオモリを十分に背負う大きなウキを使うことも重要なポイントです。へら鮎の活性が高くなる時季に小さいウキではエサを確実にタナまで届けることができません。エサがタナまで届かなければ釣りになりませんので、大きいウキを使うことが大前提です。

タックルセッティング

仕掛けは基本的に強い方向でセッティングしてください。弱いセッティングではエサを持たせることが難しくなり、釣りそのものが組み立てられません。特にウキは大きめのものを選びましょう。



エサ持ちとバラケ性のバランスが最適!!

●エサブレンド

「カクシン」600 cc+
「ほどき」200 cc+
水 200 cc



+

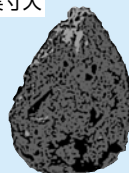


+



エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=7号

●作り方と打ち始め

「カクシン」600 cc、「ほどき」200 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせてから水 200 ccを注ぐ。ムラがないように大きく20～30回かき混ぜ、エサがまとまりだしたら基エサの完成。エサへの吸水が安定するまでしばらく放置。これを1/3に小分けして10回ほど押し練りをし、エアーを抜いて使い始める。これでウキが沈没するぐらいエサが持てばOK。持たないようならさらに押し練りで調整する。

●オモリ 実寸大

「絡み止めスイッチシンカー」0・8 g

+

0.25 mm厚板オモリ
17 mm × 27 mm

短竿

「絡み止めスイッチシンカー」
2・0 g

+

0.25 mm厚板オモリ
17 mm × 33 mm

長竿

STEP ② エサを大きく付ける

狙いのタナまでエサが届かなければこの釣りは成立しません。ウキが沈没するぐらいしっかりとナジミ幅をだして釣ることを意識しましょう。もう少しエサを持たせたいと思ったら単純にエサを大きく付けてみましょう。ハリに残るエサ量が増えれば、それだけナジミ幅も多くなります。

STEP ③ タナを上げる（竿を短くする）

なかなかウキが立たない、立つまでに時間がかかるときは狙いのタナより上に魚が多いと判断しましょう。当然エサも持たなくなり釣りが成立しません。こういう場合は、素直に竿を短くして狙うタナを上げましょう。

STEP ③ ハリスを詰める

ハリスを詰めると落下中のアピールが減り、へら鮒の ATTACK が減るのでエサが持つようになります。ウキが立ってからなかなかエサがナジまないような場面や空振りやスレアタリが多いときに試したい対応です。スタート時のハリス長が長めの設定なので、まずは5cmずつ詰めてみましょう。それでもエサが持たないようならさらに5cmずつ詰めてみましょう。また、ハリスを詰めることでサワリやアタリがでなくなったら、ハリスの長さは元に戻してください。

STEP ④ 「GD」を使いこなそう！

盛期の釣りなので、へら鮒が水面ではしゃぐような場面も多くなります。こうなるとエサが持たなくなり、より一層ウワズリを招いてしまいます。これを抑えるのに「GD」を使ってみてください。使っているエサにパラパラと振りかけて混ぜるだけ。こうすることで着水時から落下中のエサのバラケを抑えられ次第にへら鮒のタナを下げるができます。この「GD」効果はかなり有効なのでぜひためしてみてください。



両ダンゴのチョーチン釣り

釣るためのテクニック

STEP ① エサを調整する

元々ネバる素材をブレンドしてエサ持ちのよいエサに仕上げますが、作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから押し練りを加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安としては、ウキのトップ先端ギリギリまでナジむぐらいのエサ持ち加減です。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなります。こういうときは、さらに押し練りを加えてエサが必ず持つように調整します。



写真右側がエサをかき混ぜただけの状態（基エサ）。左上が押し練りを加えた状態。エアアを抜くことでエサが丸めやすくエサが持つようになる。打ち始めから押し練りを加えた状態で使い始めること。

※エサをいじりすぎると開きが悪くなり、魚の反応が悪くなります。そういう場合は押し練りを加えてない基エサを足して調整します。

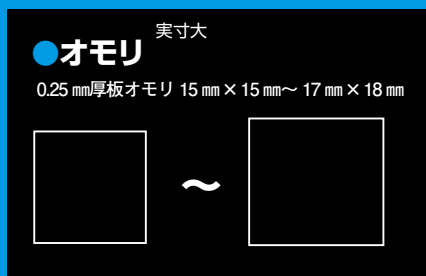
押し練り

手の甲側を使ってエサを押してエアアを抜くのが“押し練り”。エアアを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。

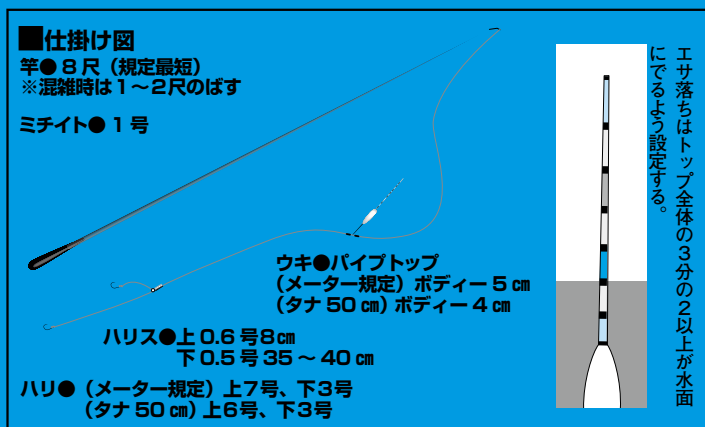


ウドンセットの 浅ダナ釣り

魚の活性が高い暖季であっても混雑時や何かしらの理由で食いが渋ることはあります。両ダンゴや「ヒゲトロ」セットでサワリやアタリが少ないときは、ウドンセットを試してみましょう。冬に行なう一般的なウドンセットは開くエサをブレンドの軸とし、寄せることに主眼を置きますが、暖季のセットはそこまで寄せを意識しません。エサを打てばある程度魚は寄ってきます。ただし、寄せすぎると釣りづらいので、少しだけ距離をとった（下ハリスが長い）セッティングで寄りの悪い状況でもアタリを増やしていくのです。極端に開くエサでは、そのバラけた粒子を追ってへら鮒は遠巻きになりますので注意が必要です。



仕掛けは基本的に強い
方向でセッティングし
てください。釣れない
ときに迷いを捨てるた
めにもセッティングは
固定しましょう。



タナまで持たせて釣るブレンド

●バラケブレンド

「粒戦」 100 cc +
「瀑麩」 50 cc +
水 150 cc +
「ふぶき」 100 cc +
「BB フラッシュ」 100 cc

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=7号



+



+



+



+



●作り方と打ち始め

「粒戦」100 cc、「瀑麩」50 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水150 ccを注ぐ。しっかり吸水させるために5～10分ほど放置する（水が滴らないぐらいまで）。そこに「ふぶき」100 ccと「BB フラッシュ」100 ccを入れ、20～30回かき混ぜてムラなく仕上げる。これが基エサで、使うときは1/3に小分けして10回ほど押し練りをし、エアー抜いて使い始める。トップ先端までしっかりナジミができればOK。ナジミが浅ければさらに押し練りする。

STEP ② タナを浅くする（※タナ規定が無い場合）

タナの規定がない釣り場に限定されますが、タナを浅くすれば落下中のエサへのへら鮎の攻撃が減ります。ウキが動きすぎる、カラツンやスレ、イトヅレが多いときはシンプルにタナを浅くしてみましょう。また、タナを浅くすることでエサも持たせやすくなりますので、しっかりナジませてからの釣りがしやすくなります。

STEP ③ ハリスを詰める

ウキが動きすぎる、カラツンやスレ、糸ズレが多いときは下ハリスを詰めてみましょう。スタートは35～40cmですので5cm詰めてみましょう。それでも釣りにくい場合は、さらに5cm詰めてみます。

STEP ④ ハリを重くする

ステップ③と同じ状況でハリスを詰めることでウキの動きがおとなしくなったり、アタリがでなくなった場合は、ハリスの長さを元に戻してハリを重くしてみましょう。ハリスの張りを強めることで、明確なアタリにつながることもあります。

タナで直下に拡散するボン系バラケ 「瀑魅」

バラケエサの基本要素は“開き”で、そのタッチはボンに仕上がります。ボンエサはまとまりにくいのでエサ付けのコントロールが難しくなります。一般的な「粒戦」に「粒戦細粒」や「とろスイミー」というパターンではエサがボロボロと崩れてエサが上手く付けられなかった方もいるでしょう。

この「瀑魅」はボンを維持しながらまとまりやすいのが特長。「粒戦細粒」や「とろスイミー」の代わりに「瀑魅」を使うことで、これまで名手しか使えなかったバラケエサを誰もが手にすることができます。また、直下にバラける特性も兼ね備えており、これによって、糸ズレにつながるようなウワズリを抑え、へら鮎をくわせエサに近づけさせてくれます。



バラケ性 強 中 弱
重 さ 重 中 軽

ウドンセットの浅ダナ釣り

基本必須テクニック

くわせエサは「カ玉ハード (S)」 「カ玉ハード (M)」 「感嘆」



ビン詰めタイプの粒状くわせエサ。エサ持ちがよくへら鮎に揉まれてもハリ抜けしにくいので、高活性時でも安心して使える。大きさが違う (S) と (M) のローテーション、より洗いたいときは「感嘆」も試してみたい。

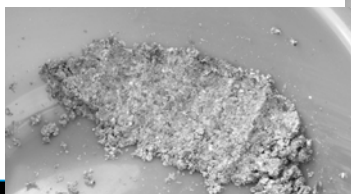


STEP ① エサを調整する

作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから押し練りを加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安としては、ウキのトップ先端ギリギリまでナジむぐらいのエサ持ち加減です。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなります。こういうときは、さらに押し練りを加えてエサが必ず持つように調整します。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押してエアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



両ダンゴで釣り切れないときが出番

「ヒゲトロ」セットの 浅ダナ釣り

釣り方の基本

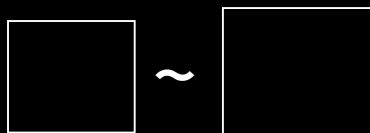
「ヒゲトロ」セットの浅ダナ釣りは、両ダンゴで釣れそうでなかなか釣れないときに有効な釣り方です。ダンゴエサに興味は示している（サワリはある）が、混雑によるプレッシャーや食いがイマイチで、ダンゴエサそのものを食わないとき、ウキの動きでいえばサワリがあるのに食いアタリがでにくいときがこの釣り方の出番です。

この釣りは、バラケエサに近づいてきたへら鮒がくわせエサの「ヒゲトロ」を食う仕組み。セット釣りとはいってもある程度バラケエサに近づける意識が必要で、場合によっては食いアタリの半分近くがダンゴエサを食ってきても問題ありません。

それには、バラケエサをタナまで持たせることが大前提。ウドンセットのように開くバラケで寄せるのではなく、しっかりバラケをナジませてから釣りを組み立ててください。

●オモリ 実寸大

0.25 mm厚板オモリ 15 mm × 17 mm ~ 17 mm × 20 mm



タックルセッティング

仕掛けは基本的に強い方向でセッティングしてください。釣れないときに迷いを捨てるためにもセッティングは固定しましょう。

■仕掛け図

竿●8尺（規定最短）

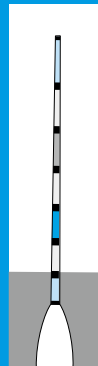
※混雑時は1〜2尺のぼす

ミチイト●1号

ハリス●上下0.6号
10 cmと18 cm

ハリ●
（メーター規定）上7号、下6号
（タナ50 cm）上6号、下5号

ウキ●パイプトップ
（メーター規定）ボディ6 cm
（タナ50 cm）ボディ5 cm



エサ落ちにはトップ全体の4分の3以上が水面にでるように設定する。

エサ持ちと開きを両立！

●バラケブレンド

「コウテン」400 cc+
「BB フラッシュ」300 cc+
「ほどき」200 cc+
水 200 cc



+



+

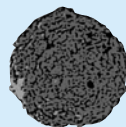


●作り方と打ち始め

「コウテン」400 cc、「BB フラッシュ」300 cc、「ほどき」200 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 200 ccを注ぐ。ムラがないように大きく 20～30 回かき混ぜ、エサがまとまりだしたら基エサの完成。これを 1/3 に小分けして 10 回ほど押し練りをし、エアーを抜いて使い始める。これでウキが沈没するぐらいエサが持てば OK。持たないようならさらに押し練りで調整する。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ＝7号

STEP ① エサを調整する

作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから押し練りを加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安としては、ウキのトップ先端ギリギリまでナジむぐらいのエサ持ち加減です。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなります。こういうときは、さらに押し練りを加えてエサが必ず持つように調整します。

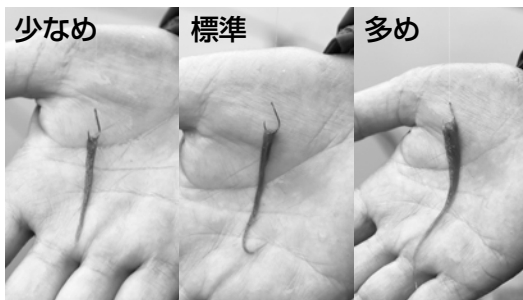
押し練り

手の甲側を使ってエサを押してエアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



STEP ② トロロ口を掛ける量を調整する

トロロ口を掛ける量の多少でアタリがでたりでなかったりもします。少なすぎて持ちが悪いことによる空振り、多すぎて食にくいことによってアタリがでないほか、長すぎ短すぎでも同じようなことが起きますので、色々と付け方を試みましょう。



STEP ③ タナを浅くする

タナの規定がない釣り場に限定されますが、タナを浅くすれば落下中のエサへのへら鮎のアタックが減りますのでその分エサが持つようになります。ですから、タナ規定がない釣り場でエサが持たないときは、シンプルにタナを浅くしてみましょう。

「ヒゲトロ」 セットの浅ダナ釣り

基本必須テクニック

くわせ用トロロエサの使い方

「ヒゲトロ」



水に浸してハリに引っ掛けるだけで、良質な繊維がしっかりとハリがかりする。チャック袋採用で、開封後も品質が安定。

「極上とろろハード」



繊維が強くネバリもあるのでハリ持ちに優れたトロロエサ。折りたたんで入っているのので、ハサミなどで好みの長さに切って使える。

①袋からトロロを取り出す。長くて強い良質な繊維が特徴。



②使う分だけちぎって取り出す。残りは袋に仕舞っておく。



③長い繊維は細かくちぎる。



④ちぎったトロロを手に乗せて水に浸す。



⑤軽く水を絞って小皿などに移す。



⑥トロロを直接ハリに引っ掛けるだけでOK。掛けるときはハリのチモトを持つと掛けやすい。



盛期のテッパン釣法

“ホタチョー”

(デカバラケ & デカウドンのチョーチンセット)

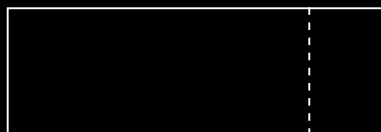
釣り方の基本

盛期の釣りの代表格は“両ダンゴ”ですが、混雑時など、思うように魚が寄せられない場面も多々あります。そんな場面を攻略する釣りが“ホタチョー”と呼ばれるデカバラケ & デカウドンのチョーチンセットです。とにかく大きなバラケを打つことで圧倒的に魚を寄せられるメリットがあります。それでいて釣りのイメージは両ダンゴのチョーチン釣り。最後にはドカンと力強いアタリで釣れるのも魅力です。

バラケエサは開くブレンドですので、それを大きく付けてナジませるにはそれに見合った大きなハリが必要です。また、厚く寄ったへら鮎のアオリに負けないような大きなウドンを使いますので、下バリも大きくなります。カテゴリーとしてはセット釣りですが、まったく別物の“ホタチョー”という1ジャンルとしてとらえてください。

●オモリ 実寸大

0.25 mm厚板オモリ 17 mm × 40 mm ~ 17 mm × 50 mm



タックルセッティング

仕掛けは基本的に強い方向でセッティングしてください。決めたセッティングで寄せと食わせのバランスが取れるように釣っていきましょう。

■仕掛け図

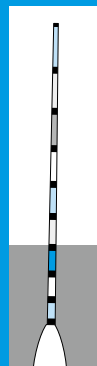
竿●10尺

ミチイト●1.5号

ウキ●グラスムク or PC ムクトップ
ボディー 12 cm
(20 cm以上の長いトップがおすすめ)

ハリス●上下1号
10 cmと40 cmスタート

ハリ●上10~15号、下8号



エサ落ちはくわせエサを付けてトップ全体の3分の2以上が水面にでるよう設定する。

昨シーズン最強ブレンド

●バラケブレンド

「バラケマッハ」500 cc＋
「凄麩」200 cc＋
「段差バラケ」100 cc＋
「BB フラッシュ」100 cc＋
「浅ダンナー本」100 cc＋
水 200 cc



●作り方と打ち始め

「バラケマッハ」500 cc、「凄麩」200 cc、「段差バラケ」100 cc、「BB フラッシュ」100 cc、「浅ダンナー本」100 ccをエサボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 200 ccを注ぐ。麩材が多いので大きく全体にムラがなくなるまでかき混ぜる。半分に小分けして10回ほど押し練りをし、エアー抜いて使い始める。これでウギが沈没するぐらいエサが持てばOK。持たないようならさらに押し練りで調整する。

●エサを調整する

作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから押し練りを加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安としては、ウキのトップ先端ギリギリまでナジむぐらいのエサ持ち加減です。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなります。こういうときは、さらに押し練りを加えてエサが必ず持つように調整します。

ただし、練り込みすぎると魚が寄らなくなりますので、練る作業は慎重に行ないましょう！

押し練り

手の甲側を使ってエサを押してエアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



●エサを大きく付ける

かならずナジミがでるようにエサ付けしますが、練って持たすよりエサを大きく付けて持たせようにしましょう。練りすぎてしまうと魚の反応が悪くなります。また、くわせエサも大きく付けます。小さいくわせではへら鮒のアオリに負けてしまったり、逆に興味が引けずにナジミ切ってしまうこともあります。

●下ハリスを詰める

スタートは40cmですが、これは最長の長さと思ってください。へら鮒が寄れば空振りや糸ズレなど余計な動きが目立ってきます。そうしたらどんどんハリスを詰めていきましょう。詰める幅は5cmずつで25cmぐらいまで詰められるのが理想的です。

“ホタチョー”

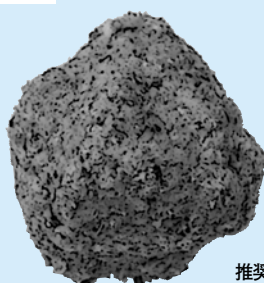
基本必須テクニック

バラケエサは特大！

大きなバラケエサを打つことでへら鮎を多く厚く寄せるのがこの釣りのデフォルト。こんなに大きなエサでいいの？と思うぐらいの大きさのバラケを打ち切りましょう。また、この大きなバラケをタナまで持たせなければ意味がありません。エサの大きさに見合った大きなハリを使うことも絶対条件です。最初は付けにくいかもしれませんが、次第に慣れてきます。最初はとにかくエサが持つように付けることだけ意識しましょう。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ＝10～15号

くわせエサも特大！！

大量にへら鮎を寄せて釣る釣り方ですので、当然へら鮎のアオリが強くなります。そのアオリに負けないようにくわせエサも大きな物を使います。また、大きなくわせエサを使うことでアピール力も高まり、くわせに対する受けや止めもです。

実寸大



「カ玉ハード (L)」

ビンから取り出して、そのまま使える粒状くわせエサ「カ玉ハード」シリーズ。一般的な絞り出しうどんに近い (L) サイズを使う。



「魚信」

レンジで作れる絞り出しうどん。太く絞り出す必要があるのって、絞り出し器のノズルを付けずに絞り出す。



「感嘆」 + 「感嘆Ⅱ」

「感嘆」1袋と「感嘆Ⅱ」1袋を混ぜ合わせた粉25ccに対して水25ccで作る。径を太くしたオカユポンプから押し出して使う。大きさの目安は8ミリ。



ナジミ幅のキープを意識しよう

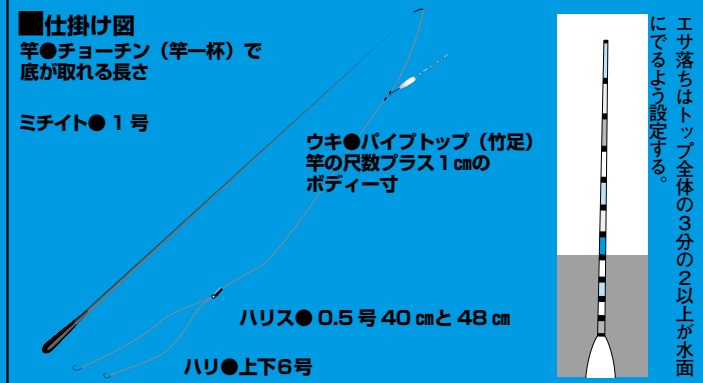
ペレット系 両ダンゴの底釣り

釣り方の基本

底釣りは独特の動きが楽しめ、ある意味へら鮒釣りで一番面白い釣り方とも言えます。盛期の底釣りはしっかりエサをナジませないとウワズリを招いたり、ウキが動きすぎて釣りづらくなります。3～4目盛りしっかりナジミ幅をだし、魚が寄ってきてからもこの3～4目盛りのナジミ幅をキープするようにします。このナジミ幅をキープするには、エサ付け圧（強さ）の強弱、エサの大きさをコントロールします。魚が少ない（ウキの動きが静か）ときは大きめで圧は弱め、魚が多い（ウキがよく動く）ときは小さめで圧は強くなど、1投ごとにウキの動きを見ながらのエサ付けを意識してください。

タックルセッティング

仕掛けは基本的に強い方向でセッティングしてください。竿の長さは竿一杯（チョーチン）で底が取れる長さを選びましょう。ウキは大きめで、釣れないときに迷いを捨てるためにもセッティングは固定しましょう。



●オモリ 実寸大

●水深 2～3m
「絡み止めスイッチシンカー」0.8g + 0.25mm厚板オモリ 8mm×30mm



+



●水深 2～3m

●水深 4m 前後

「絡み止めスイッチシンカー」1.2g + 0.25mm厚板オモリ 8mm×30mm



+



●水深 4m 前後

集魚とエサ持ち抜群ペレット系ダンゴ

●エサブレンド

「ペレ底」150 cc+
「もちグル」50 cc+
「粘力」 付属スプーン山盛り 1 杯+
水 150 cc



+



+



+

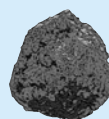


●作り方と打ち始め

「ペレ底」150 cc、「もちグル」50 cc、「粘力」付属スプーン山盛り1杯をエサボウルに入れ、軽くかき混ぜてから水150 ccを注ぐ。ムラがないように大きく20回ほどかき混ぜ、ボウルの隅に寄せるようにしてしばらく放置。しっかり吸水したら基エサの完成。これを1/3に小分けして10回ほど押し練りをし、エアーを抜いて使い始める。これで3～4目盛りのナジミ幅ができればOK。ナジミが少ないようならさらに押し練りで調整する。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ=6号

●タナ取り

底釣りはタナ取り（水深を測ること）がすべてといわれるほどタナは重要です。釣りを始める基準であり、地形変化や底の状態の変化（釣っている途中でヘドロやゴミが取り除かれて水深が変わること＝底が掘れた）を知るための唯一の手段です。このタナ取りをおろそかにしては底釣りは釣れません。動画でわかりやすく解説しているのでチェックしましょう。



③ウキをズラす

水面にでたトップ先端の位置に合わせるようにミチイトに目印のトンボを付け、その位置に宙で決めたエサ落ち目盛りを合わせる。これが上バリトントンといわれる設定だが、これでは上ハリが底から切れる可能性が高いので、ここから5cmウキを上へ動かしてスタートする。



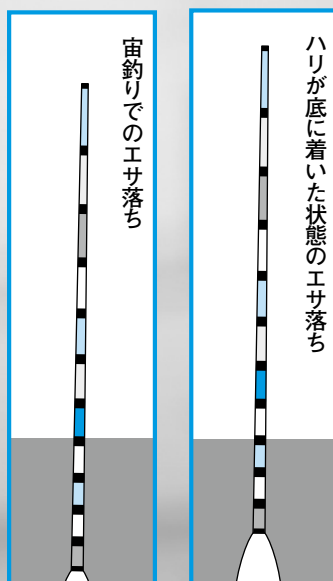
目印のトンボを基準にしてウキの位置を動かす。

④ハリが底に着いた状態のエサ落ちを確認

ウキをズラしたらエサを付けない状態で打ち込み、エサ落ちを確認する。ハリが底に着いていれば、その重さがウキにかからないので、宙で確認したエサ落ちより目盛りが多くでる。それが確認できればOK。

仮に宙で決めたエサ落ちを7目盛りだとして、ハリが底に着いた状態では7目盛り以上水面にでることになる。ただし、実釣においては水流や底の状態などで必ずこの目盛りがでるとはかぎらないが、7目盛りより沈んで戻ってこない場合はタナをズラす（深くする）かタナを測り直すこと。

タナ取りが可能となります。



バランスの底釣り

【実演】タナ取り方法

【実演】フロートを使用した底釣りのタナ取り方法

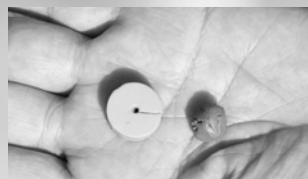
フロートを使用した **実演** 底釣りのタナ取り方法

① 宙の状態のエサ落ちを確認

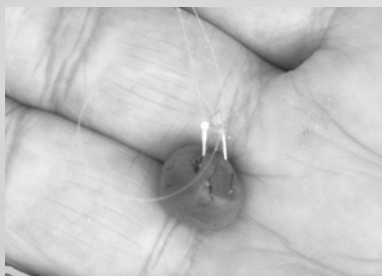
上下両方のハリを付け、宙釣りの状態のエサ落ちを確認する。

② タナを測る

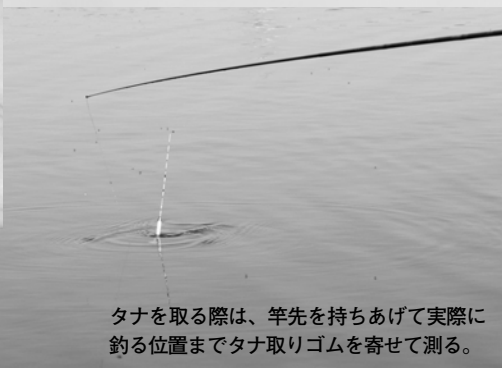
両方にタナ取りゴムを付け、ウキにフロートを付けて水深を測る。普通に打ち込んだだけでは沖を測ってしまうので、ウキを持ち上げるように竿先をあげ、ウキの下にタナ取りゴムがくるようにする。トップ先端が水面にでる位置にウキをセットする。このとき、左右の水深も測っておくこと。



タナ取り時は、フロートとタナ取りゴム（粘土オモリ）を使うと素早く測ることができる。



タナ取りゴム（粘土オモリ）に上下2本のハリを刺してタナを取る。



タナを取る際は、竿先を持ち上げて実際に釣る位置までタナ取りゴムを寄せて測る。

より正確なタナ取

再生 (k)

STEP ④ エサを調整する

作ったエサをそのまま使うのではなく、打ち始めから押し練りを加え、しっかりエサが持つ状態でスタートしてください。目安として、ウキのナジミ幅が3～4目盛りでるエサ持ちを心がけます。次第に魚が寄ってきますと、徐々にエサ持ちが悪くなりますが、そのときはさらに押し練りを加えて3～4目盛りのナジミ幅をキープするように調整します。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押してエアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。



STEP ⑤ ナジミ幅を意識しよう

底釣りでは、ウキのナジミ幅が重要な情報源です。エサ持ちの有無だけでなく、底が掘れた（ヘドロなどが取れること）、ハリスが絡んだなどを知る手がかりです。両ダンゴの底釣りの場合、3～4目盛りのナジミ幅がでるのが基準です。これよりナジミが少ない場合は、エサが持っていないかタナをはわせすぎていることになります。逆に多い場合は、エサが底から切れている、ハリスが絡んでいる可能性があります。そして寄る魚量が増えても同じナジミ幅をキープできるようにエサを調整（押し練り、手揉み、エサの大きさ）して釣っていきます。

両ダンゴの底釣り

基本必須テクニック

STEP ① ウキの選択

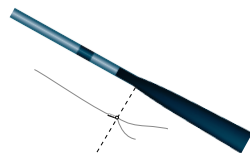
ウキのサイズは竿の長さ（＝水深）によって変わってきます。竿の尺数プラス1cmが基準となります。前後1cmのサイズなら問題ありませんが、極端に小さいものや大きいものは避けましょう。

竿の長さごとのウキのボディサイズ

8 尺	9 cm	13 尺	14 cm
9 尺	10 cm	15 尺	16 cm
10 尺	11 cm	16 尺	17 cm
11 尺	12 cm	18 尺	19 cm
12 尺	13 cm		

STEP ② 仕掛けの長さを決めておこう

タナが生命線の底釣り。釣っている途中でタナがおかしくなることもあります。理由としては“底が掘れた”ことが多いですが、仕掛けのミチイトの伸び縮みが原因ということもあります。それを判断するためにも仕掛けの長さを把握しておきましょう。



たとえば、スイベルがくる位置を握り上部、竿との継ぎ目と決めておく。

STEP ③ スタートのタナ設定

エサが確実に底に着く状態で打ち始めるために、タナ取りで決めた上バリトントンの位置から5cmズラした（深くした）タナから始めましょう。そして、実際にエサ打ちをして3～4目盛りのナジミ幅がでることを確認してください。ナジミ幅が多いときはエサが底から切れている、逆に少ないときはハリをはわせすぎている可能性があります。

新べら狙い! (10月以降)

両グルテンの 宙釣り

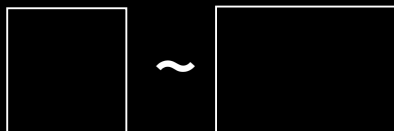
釣り方の基本

10月頃から始まる新べら放流。放流された新べらは池全体の手前や奥などに溜まりやすく、沖に着いたり、端にかたまったりします。一般的には長めの竿で沖を狙うのがセオリーです。タナは1.5mぐらいからスタートし、これでアタリが多いようなら浅く、アタリが少ないようなら深くします。そのまま底に付けるのも一手です。とにかく、新べらがいる泳層を見つけるのが一番です。

エサはグルテンが基本になります。集魚力の弱いグルテンを使うのは、新べらが溜まっているエリアを狙うことを前提にしているから。旧べらを寄せず、溜まっている新べらを食べさせるという発想です。そして、より自然に新べらを食べさせるためにも軽さが特長のグルテンエサが非常に有効になるのです。

●オモリ 実寸大

0.25mm厚板オモリ 17mm×16mm～
17mm×24mm



タックルセッティング

竿の長さは周囲との兼ね合いで制御できる範囲で選びましょう。振り込みが難しい場合は、仕掛けを短くして対処します。ウキは狙うタナに合わせて大きくしていきましょう。

■仕掛け図

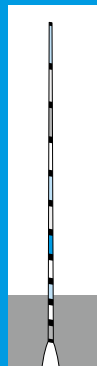
竿●15～18尺

ミチイト●1号

ウキ●PCムクトップ
ボディー10cm
※タナ1.5～3m

ハリス●上下0.5号
45cmと60cmスタート

ハリ●上下6号



エサ落ちはトップ全体の約4分の3以上が水面にでるよう設定する。

エサ持ちよく新べらにアピール！

●エサブレンド

「新べらグルテン」100 cc+
「もちグル」25 cc+
「わたグル」25 cc+
水 175 cc



+



+



+



●作り方

「新べらグルテン」100 cc、「もちグル」25 cc、「わたグル」25 ccをグルテンボウルに入れて軽く混ぜ合わせたところに水 175 ccを注ぐ。全体に水がゆきわたるよう 20 回ほどよく混ぜる。若干固まりだしたタイミングでグルテンボウルの隅に寄せて固まるまで放置。固まったらボウルの中で半分ほどに小分けし、押し練りをして打ち始める。5～6目盛りのナジミ幅ができれば OK。それより浅ナジミならさらに押し練りを加える。

エサの大きさとハリ

実寸大



推奨ハリサイズ＝6号

●放流情報

まず知らなければならないのが放流情報。いつ新べらが入って、何トン放流されたかです。もちろん、放流日から近ければ近いほうが確率は高いですし、放流量が多いほうがベストです。放流は1回だけではなく、2回、3回と繰り返しますので、その回数も重要になってきます。情報は池のホームページで告知されたりもしています。ない場合は直接電話で問い合わせましょう。

●竿は長めが◎

フレッシュで食い気のある新べらを狙う場合、沖打ちや外向きを釣るので、必然的に竿は長くなります。これは手前に寄る旧べらを避けるためでもあります。釣り場の規模にもよりますが15尺以上、18尺から21尺を使うのが一般的です。空いているときや放流直後で短竿で釣れるときもありますが、短くても12尺ぐらいまでです。

●振り込みやすくする

ウキは長竿で沖を狙うので、ある程度の大きさ（オモリを背負う）でないと振り込みがしづらいです。少し大きいぐらいでも問題ありません。また振り込みにくい場合は仕掛けを短くしましょう。

●ゆっくりアピール

両グルテンの釣りは、軽いグルテンエサを長めのハリスでゆっくり落とすことで、エサをアピールさせて釣ります。ナジむスピードもゆっくりになります。エサをゆっくり落下させるにはハリもできれば小さいほうがいいでしょう。6号でスタートしますが、ナジミ途中のサワリが少ないときは、5号とサイズを小さくしてハリを軽くします。ただ、肝心のエサが持たなければ意味がありませんので、エサが持たないようならハリサイズを戻しましょう。また、ゆっくり落下しているときのサワリなどをより演出するために、ウキのトップはPCムクトップで長さのあるものをおすすめします。僅かな変化や小さいアタリなどを見逃さないためにも必要です。ちょっと止まるような動き、僅かなスピードの変化が食いアタリであることも多いからです。

両グルテンの宙釣り

実釣基本テクニック

●エサを調整する

グルテンエサはエサ持ちがよいと思われがちですが、水に入ると水分を吸って膨らみ魚のアオリが強いときはハリから抜けやすくなります。また、グルテンエサはそのまま使えとも言われますが、エサが持つように押し練りや手揉みでの調整は躊躇せず行ないます。



エサが持つまで押し練りを繰り返す。やりすぎると開きが悪くなるので、こまめに何度か繰り返しながらエサを持たせられる接点を見つめよう。

押し練り

手の甲側を使ってエサを押し、エアーを抜くのが“押し練り”。エアーを抜くことでエサがまとまりエサ持ちがよくなる。この“押し練り”を繰り返してエサが持つようにする。

手揉み

つまんだエサを指先で揉むようにして丸めてエサ付け。この手揉みの回数でエサ持ちを調整する。



● 2024M-1CUP 優勝ブレンド

● DATE / 9月29日 8尺ウドンセットの浅ダナ釣り

「粒戦」100 cc+
「もじり」100 cc+
「BB フラッシュ」100 cc+
水 100 cc



● タックル/竿=8尺、タナ=1m、ミチイト=1号、ハリス=0.5号8cmと38cm
 ハリ=上6号、下3号、ウキ=ポディー5.5cm/パイプトップ

● 2023M-1CUP 優勝ブレンド

● DATE / 7月30日 9尺両ダンゴのチョーチン釣り

「凄魅」400 cc+
「カクシン」200 cc+
「カルネバ」200 cc+
水 280 cc+
「浅ダンナー本」200 cc



● タックル/竿=9尺、タナ=チョーチン、ミチイト=1号、ハリス=0.5号30cmと40cm
 ハリ=上9号、下8号、ウキ=ポディー10cm PC ムクトップ

今シーズンのキモ

盛期の実績ブレンド紹介！

「ほどき」はここでも活躍する！



近年のエサブレンドの傾向はネバリがあるパターンが主流です。ダンゴエサであれば「カクシン」、「カルネバ」といったエサが必ず入っています。手返しの早い名手達は、経時変化によるネバリが少ないうちにエサを打ち切ったり、手水や開くエサで調整して使いこなしています。しかし、それには限界があり、特にムダにいじりすぎたエサでは極端に開きが悪くなり、へら鮎の興味を惹けずサワリすらだせない状況に陥ってしまいます。

それを解決するのが新発売の「ほどき」。ネバリすぎを感じたら使っているエサにパラパラと振りかければエサの開きが復活します。これまで使ってい

るエサに開く素材を足すと開きすぎてエサ持ちが悪くなることもありましたが、「ほどき」ならその心配もありません。エサ持ち感はそのままだけにプラスしてくれます。

ここで紹介しているブレンドは近年実績を残した釣れるブレンド。このブレンドを使い、魚の反応が悪くなったタイミングで「ほどき」を追い足してみてください。驚くほどにエサが復活します。今シーズン、ぜひお試しアレ！

● 2025M-1CUP 優勝ブレンド

● DATE / 8月31日 8尺両ダンゴのチョーチン釣り

「カクシン」400 cc+
「コウテン」200 cc+
「カルネバ」100 cc+
「浅ダナー一本」100 cc+
水 250 cc



● タックル／竿＝8尺、タナ＝チョーチン、ミチイト＝1.2号、ハリス＝0.6号 30 cmと 40 cm
 ハリ＝上下7号、ウキ＝ポディー 8.5 cmパイプトップ

芯の強弱、自由自在。

近年、使われるシーンの多い「カクシン」や「カルネバ」など、軽くてネバリのあるエサが生む「芯の強さ」をコントロールしやすくするブレンドエサ。最初から加えると、開きのよい仕上がりに持つ方向へと手を加えられる幅が広げられる特性を発揮。また、使っているエサにひとつまみ追い足して使えば、行き過ぎたネバリをほぐし、タナで理想的な膨らみをもたらせるようになります。練った際に重さがでにくく、経時変化などによるエサの持ちすぎの抑止にも効果的です。

●ほどき 280g(チャック袋)

新発売

